

平成30年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名	国立大学法人愛知教育大学
-----	--------------

I 概要

1 選択したテーマ

テーマ	取組項目	選択
①交流及び共同学習を継続的な取組とするために、教育課程への位置付け等、組織的かつ計画的な取組の在り方に関する研究	(ア) 通常の学級に在籍する全ての児童生徒等に交流及び共同学習の機会を学校として計画的に実施するための方法に関する研究	○
	(イ) 障害のある児童生徒及び障害のない児童生徒等が、交流及び共同学習を通じ、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むために、交流及び共同学習のねらい、事前学習と事後学習、年間指導計画への位置付けの効果的な工夫に関する研究	○
	(ウ) 通常の学級の担任などの教職員が主体的に交流及び共同学習に取り組むための体制整備の在り方及び教職員の意識向上に関する研究	
	(エ) ICTを活用した交流及び共同学習に関する研究	
②学校間交流や居住地校交流等を進めるための関係する教育委員会との連携の在り方の研究	(ア) 特別支援学級が設置されていない小・中学校における学校間交流を推進するための学校と教育委員会の連携の在り方に関する研究	
	(イ) 高等学校における学校間交流や居住地校交流を進めるための学校と教育委員会の連携の在り方に関する研究	
	(ウ) 学校間交流や居住地校交流等を進めるための市町村教育委員会と都道府県教育委員会又は市町村教育委員会と市町村教育委員会の連携に関する研究	
	(エ) 居住地域の小・中学校等に副次的な籍を置くなど、居住地域との結びつきを強める工夫に関する研究	
③障害のある大人の人との交流や地域における高齢者等の世代を超えた交流の在り方に関する研究	(ア) 障害のある大人の人との交流に当たり、福祉部局や社会福祉法人等と連携したネットワーク形成に関する研究	
	(イ) 教育委員会と地域の関係者による「心のバリアフリー連絡協議会(仮称)」を設置し、取組状況や実施体制などの成果と課題について協議するなど、地域に心のバリアフリーの意識を啓発し根付かせるための研究	
	(イ) 高等学校の生徒や特別支援学校の高等部の生徒が、継続的に地域の障害のある大人の人との交流をするための方策に関する研究	

2 事業概要

1 モデル地域の概要

愛知教育大学附属岡崎小学校	児童数	598名	教職員数	27名
愛知教育大学附属岡崎中学校	生徒数	460名	教職員数	27名
愛知教育大学附属特別支援学校	児童生徒数	62名	教職員数	34名

2 事業の目的

- ・障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が、共に創作活動をする方法を追究する児童生徒を育成する。
- ・実践の結果を地域に示し、地域の障害者理解の取組として発展させる。

3 事業の目標

- ・低い年齢段階から体験的に障害に対する理解を深める。

4 事業の内容

- ・障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が文化・芸術を通じた交流を行うことにより、体験的に障害に対する理解を深め、共に尊重し合いながら協働して生活できるように交流、及び協働学習を設定し、実践を行う。
- ・共に創作する方法を追究することについて児童生徒の取り組んだ経過を分析して提示する。
- ・「文化・芸術を通じた交流実践」の効果について分析し、地域へ提言する。

3 事業の成果

①造形教育をとおしての共生教育のあり方

—附属特別支援学校（全校）、附属岡崎小学校（福祉委員会・5年3学級・2年3学級を中心とした全校）、附属岡崎中学校（3年A組）で企画した美術作品展—

（1）目標

- ・作品の共同制作や相互作品の鑑賞を通して、附属岡崎小学校、附属岡崎中学校、附属特別支援学校の児童生徒の交流を図り、相互の人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える心を育てる。

（2）活動内容

- ・附属岡崎小学校、附属岡崎中学校、附属特別支援学校の三校が連携して共同制作したり、美術館で作品を展示し、鑑賞したりする。

（3）取り組みや実施の工夫

- ・附属岡崎中学校の3年A組の代表生徒が、附属岡崎小学校、附属特別支援学校を訪れ、①「一緒に共同作品を制作しよう」、②「展覧会を開こう」と附属岡崎小学校、附属特別支援学校の児童生徒に伝え、生徒主体で活動を行った。
- ・附属岡崎中学校の生徒が、大きな画用紙に幹を描き、附属特別支援学校の児童生徒がその上から花を描く。最後に、附属岡崎小学校の児童が虫を描くなど、それぞれの発達段階を考慮した共同制作を行うことができた。
- ・中学生の作品を小学生が鑑賞、質問をする機会を設定した。

（4）成果

- ・実際に作品を岡崎市美術館に展示することで、制作することの目的意識を感じられたり、多くの人に鑑賞してもらい、感想をもらったりすることで充実感を得ることができた。
- ・附属三校で一つの作品を制作することで、完成後に作品を鑑賞し、個性を尊重し合う

感想がみられた。

② 造形教育を通しての共生教育の在り方（附属特別支援学校）

－附属特別支援学校（全学級）、附属岡崎小学校（福祉委員会・5年3学級・2年3学級）、附属岡崎中学校（3年A組）での共同制作－

（1）目標

- ・作品の共同制作を通して、附属特別支援学校、附属岡崎小学校、附属岡崎中学校の児童生徒の交流を図り、障害の有無、年齢差など、個々の違いを認め合いながら、互いのできることやよさを尊重する心を育てる。

（2）活動内容

- ・附属特別支援学校、附属岡崎小学校、附属岡崎中学校の児童生徒が関わる作品を共同で制作する。また、附属特別支援学校と附属岡崎中学校がそれぞれ主催する美術展において展示し、附属岡崎小学校の児童も含め、鑑賞を行う。

（3）取り組みや実施の工夫

- ・附属特別支援学校、附属岡崎小学校、附属岡崎中学校の図画工作・美術担当教諭が、それぞれの学校の児童生徒のできることを提案し合い、共同で制作することのできる作品を検討し、制作時期について決定をした。
- ・「お花いっぱい 虫いっぱい」と題し、附属岡崎中学校の生徒が、大きな模造紙に木の幹を描き、附属特別支援学校の児童生徒が、その上に手形をつけて花を表現し、附属岡崎小学校の児童が、木の周りに虫を描くという、それぞれの児童生徒のできることを集約した共同作品を制作した。
- ・附属岡崎中学校と附属特別支援学校、それぞれが主催する美術展において、附属岡崎小学校を含む三校の児童生徒が、協力して作り上げた作品を鑑賞し、互いのできることやよさを理解することができた。さらに、一般来場者の方々にも、鑑賞してもらうことができた。

（4）成果

- ・制作段階では、それぞれの学校での取り組みとなったが、でき上がった作品の鑑賞を通して、附属特別支援学校、附属岡崎小学校、附属岡崎中学校の児童生徒のできることやよさを、互いに知ることができた。
- ・美術館で美術展を開催することで、主催校の展示に関心をもって来場された方々に、他の二校の児童生徒にも興味をもってもらうことができ、三校で取り組んでいる共生教育の意義を感じていただくことができた。

③ 造形教育をとおしての共生教育の在り方

－附属岡崎小学校（2年3学級）、附属特別支援学校（小学部）での交流－

（1）目標

- ・絵の具遊びを通して附属特別支援学校、附属岡崎小学校の児童生徒の交流を図り、障害の有無、年齢差など、個々の違いを認め合いながら、互いのできることやよさを尊重する心を育てる。

（2）活動内容

- ・附属特別支援学校、附属岡崎小学校の児童が絵の具遊びを通じた交流を行う。

（3）取り組みや実施の工夫

- ・附属特別支援学校、附属岡崎小学校の図工担当教諭が、それぞれの学校の児童が、できることを提案し合い、創作活動を通して交流できることを考え、交流にあたり、各校の児童生徒について予め配慮することなど、打ち合わせをしておくことで、万

全を期して実践に取り組むことができたと考える。

(4) 成果

- ・絵の具遊び交流では、附属特別支援学校の児童生徒と一緒に、スタンプで模様をつけたり、ローラーで好きな色を塗ったりして、絵の具に親しみ遊ぶ姿が見られた。使いたい色と一緒に探したり、手を取って一緒に絵の制作をしたりするなかで、相手のよさに気づくことができた。
- ・絵画の制作では、相手のできることを考え、附属特別支援学校の児童生徒に寄り添った考え方をすることができた。ペアが押したスタンプを花に見立てたり、偶然にできた模様を楽しんだりすることができた。

4 事業の課題とその解決のために必要な取組

- ・各校主幹教諭を中心に日程について連絡調整を行った。実践に関しては、実務者レベルである教諭同士が連絡を取り合いながら、ねらいを明確にした交流を行った。一方で、実務者としての打ち合わせは細かな日程の調整に留まり、相互の児童生徒の理解が不十分であったため、ねらいと教師支援がうまくかみ合わないことがあった。モデル地域の三校は、平成28年度より共生教育（インクルーシブ教育を展望した小、特支、中の連携による教育活動）を推進し、運動・創作活動以外の共同学習も展開していたため、他の共同学習との連携を図りながら修正を加え、より充実したものにしていく必要がある。
- ・交流及び共同学習を行った学級では、障害のある児童生徒への意識の変容があったと言える。制作についての呼びかけや、でき上がった作品の鑑賞による交流はできたが、制作過程において一緒に活動することができず、相手を意識することが難しかった。障害のある子どもたちにとって、自分にできる活動で参加すること、でき上がったものが目で見てわかることは、子どもたちが一緒に取り組んだという理解に結びついているとなっていると考える。このことから、制作過程から一緒に活動する機会をより多く設けていくことの必要がある。
- ・日程調整を行った主幹教諭や実務者レベルで実践を行った教諭が年を重ねるごとに実務者が増えてきたため、心のバリアフリー教育を持続、発展させる意義を多くの実務者が感じることができていた。附属特別支援学校の児童生徒数が少ないため、附属岡崎小学校、附属岡崎中学校全ての児童生徒に交流、共同学習の場をもつことができなかった。多くの児童生徒がかかわれるような実践も展開し、事前に全校児童生徒に活動内容を伝えていくことで、より多くの子どもたちがかかわることができるようにしたい。